

エティエンヌ・パスカルから見えるデカルト像

——1638年のパリ——*

武 田 裕 紀

Image de Descartes vu par Etienne Pascal —A Paris en 1638—

Hiroki TAKEDA

キーワード：エティエンヌ・パスカル、デカルト、フェルマ、ロベルヴァル、モラン、メルセンヌ・アカデミー、接線決定法

1. エティエンヌ・パスカルとその周辺

オランダに在住していたデカルトが当時のフランスでどのように受け入れられたのか、この問いに一般的な仕方で答えることは難しい。しかしある時期のあるグループにどのように受け入れられたのかという問いに対しては、ある程度答えることができるように思われる。本稿では、『方法序説』出版直後である1638年、そしてパリのメルセンヌ・アカデミー、その中でもとくにエティエンヌ・パスカル（以下エティエンヌと略記）に焦点を当てて、この問題を考えてみたい。エティエンヌを選ぶのは、ひとつは、息子ブレーズのデカルト観に一定の影響を及ぼしたのではないかというパスカル研究の関心からであり、ふたつめには、両者の間には直接の面識がなく¹、それゆえわれわれが問題としているデカルトの「像」を知るには好都合であるからであり、三つめには、ロベルヴァル、ボーグラン、モランといったデカルトがよきにつけ悪きにつけかかわった学者たちと、エティエンヌが浅からぬ縁をもっているからである。

エティエンヌ・パスカルとデカルトとの直接的な通信の記録は、ただ1回、1638年3月1日

* 本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「17世紀前半における知の基軸としての光学—デカルトとその論争者を通して—」研究課題番号：24520093による研究成果の一部である。

1 デカルトがパリからオランダに向かうのは1629年、他方、エティエンヌがクレルモン＝フェランからパリに出てくるのは1631年なので、両者は入れ違いになる。

のデカルトからロベルヴァルおよびエティエンヌ宛書簡に確認できるのみである（この文書の往信は散逸）。しかもこのあと、エティエンヌはパリ市債の件で、セギエの館で一悶着起こした後、逃亡生活に入る。4月にロベルヴァルがデカルトに対し再反論を送った際には、「パスカル氏は不在」²と記されていて、親しい友人のあいだからも身を隠していたことがわかる。エティエンヌがクレルモン＝フェランを経てパリに戻るのは、翌年の5月を待たなければならない。したがって、1638年8月ごろまでくすぶり続けるデカルトとの論争の顛末は、1639年になって友人たちから伝えられたり、当時の書簡を回覧してもらうことによって、事後的に知るところとなったであろう。空間的にも時間的にも、エティエンヌとデカルトの遭遇は間接的である。さらに内容の点からも、デカルトとの論争は間接的なものであった。というのも、エティエンヌとロベルヴァルの書簡は、フェルマの『極大・極小論』をデカルトの批判から擁護するものであったからである。このような三重の間接性は、エティエンヌから見えるデカルトを、実像ではなくて、フェルマというスクリーンに投影された映像のようなものにしたことであろう。

このデカルト＝フェルマ論争にあたっては、デザルグ、アルディ、ミドルジュといったその他のメルセンヌ・アカデミーのメンバーたちも、それぞれの仕方て介入を余儀なくされ、残された書簡から、これらのメンバーがとった立場は概ね知ることができる。ミドルジュのようにデカルトの立場を代弁するようデカルトから求められた人物もいるし、デザルグのように仲裁に入ろうとした人物もいる。しかしエティエンヌ自身がロベルヴァルと連名の書簡をデカルトに送っている以上、この問題についてはロベルヴァルの見解をほぼ共有していると見るべきであろうし、またデカルトもそのように考えていたであろう。

フェルマ関連では、ボーグランの存在を忘れるわけにはいかない。ヴィエトの解析技法に注釈をつけて出版した数学者であったボーグランが1636年に出版した『地球静力学』は、フェルマとエティエンヌが書簡上ではあるが知己を得る機会を提供した。二人はそれぞれ、この問題の多い著作に対して異なった評価を下したのだった。デカルトにとっては、セギエの秘書官ボーグランは、『方法序説』出版に際してなにかと「悪ふざけ」³をする好ましからぬ人物として登場する。しかもボーグランは（おそらくメルセンヌの口利きのもと）、検閲用に預かった『屈折光学』を事前にフェルマに貸与し、フェルマはメルセンヌの求めに応じて、出版前に『屈折光学』への反論を書いた。こうした事の実績は、出版許可という繊細な手続きと絡んで、フェルマそしてボーグランに対するデカルトの不信感を増長していった。セギエの秘書官という重責にいたボーグランは、デカルト像を映し出すもう一つのスクリーンになっていた可能性はあ

2 デカルトからの引用は、*Œuvres de Descartes, publiées et annotées par Ch. Adam et P. Tannery, 1897-1909, réédition Vrin-C.N.R.S., 11 vol., 1964-1974*. AT. と略記し、以下巻数、頁数を記す。ロベルヴァルよりデカルトに抗して、1638年4月付(AT. II, p. 115)。

3 デカルトからメルセンヌ宛、1638年7月27日(AT. II, p. 272)。

る。ただそうだとすると、ボーグランは1638年に亡くなるので、彼のエティエンヌに対する影響は、それほど大きく見積もる必要はないかもしれない。

もう一つの意外なスクリーンは、コレージュ・ド・フランスの数学教授ジャン・バティスト・モランである。モランが1634年に提唱した天文学を活用した海上経度決定法は、リシュリユーの注目を受け、その有効性を調査するための委員会がすぐさま設立された。エティエンヌはその調査委員のメンバーの一人であった。委員会はこの方法を、理論的には正しくとも实用性に乏しいという理由で退けた。モランは反論の書⁴を刊行し、当時の審査委員会のひとりであったエリゴヌが再びこれに反対するなど、論争は1638年当時も続いていた。

他方でデカルトとは、比較的親しい関係にあったと思われる。1620年代にデカルトがパリに滞在していたころから顔なじみであったし、海上経度の本をデカルトに献呈している。この著作を高く評価したデカルト⁵に対しモランは心を開いていたのか、エティエンヌら調査委員会に対する不満を率直に吐露している。また光学に関心のあったモランは『屈折光学』に対する長尺の反論をデカルトに送付し、デカルトはこれをフランスから送られた唯一の考慮に値する反論⁶と述べ、一定の評価を与えている（ただし3回にわたるモランの反論には、次第にデカルトとのかみ合わせの悪さが目立ち始める⁷）。自然学以外の領域でも、メルセンヌがパリの神学者たちの反論を取り混ぜたと語っている『省察』第二反論の著者の一人に、このモランを想定している研究者⁸もいるし、その答弁である第二答弁に付録された「幾何学的な様式で配列された諸根拠」は、モランの『神が存在するということ (*Quod sit Deus*)』の論証スタイルを模したものであると考えられている。

この天文学者モランは、ガリレオに反対する熱心な天動説の支持者であり、筋金入りのアリストテレス主義者という顔を持っていた。エティエンヌと対立しているこのアリストテレス主義者がデカルトと懇意であるという事実は、エティエンヌの眼にはどのように映ったであろうか。当時のパリは、メルセンヌがガリレオの『レ・メカニケ』の自由訳を刊行し、さらにロベルヴァルがガリレオ流の『力学論』を発表し、イタリアの最新の学術が一気に消化され始めた時期であった。このようなパリの思潮からすれば、エティエンヌから見たモランの姿はおのずと明らかであるし、そのモランからの反論をフェルマからの反論よりも多とするデカルトは、「あちら側の人間」に見えたとしても不思議ではない。エティエンヌにとってのモランは、デカルトを映し出すもう一つのスクリーンとなった可能性がある。

4 *Longitudinum terrestrium necnon coelestium nova et hactenus optata scientia* (1638年6月12日印刷完了)。

5 デカルトからメルセンヌ宛、1634年9月または10月 (AT, I, p. 313)。

6 デカルトからメルセンヌ宛、1638年6月27日 (AT, II, p. 191)。

7 「彼の考えは、私の考えとは今では始め以上に隔たっているように思われます。ですから、われわれが同意し合うことはないでしょう。」デカルトからメルセンヌ宛、1638年11月15日 (AT, II, p. 437)。

8 Daniel Garber, *Descartes embodied*, Cambridge University Press, 2001, p. 64-84.

本稿では、以上三面のスクリーンのうち、フェルマ（ないしフェルマの代弁者としてのロベルヴァール）とモランを取りあげ、当時のエティエンヌの眼に映ったであろうデカルト像を検討していこう。

2. デカルト＝フェルマ論争

フェルマとデカルトの論争は、まず始めに『屈折光学』におけるいくつかの概念が混乱をきたしていることを指摘したフェルマの反論によって口火を切られる。この反論は、『屈折光学』出版前にすでになされていた。というのも、デカルトは出版許可の便宜をとってもらうために、メルセンヌに『方法序説と三試論』を1部送っていたのだが、本来なら出版許可のためにセギエ大法官の秘書であったボーグランに提出するべきはずのものを、メルセンヌが短期間フェルマに貸して彼の意見を求めたのか、あるいは、ボーグランがかつてトゥールーズ高等法院の同僚であったフェルマの求めに応じて彼に『屈折光学』を貸し出し、これを知ったメルセンヌがフェルマに意見を求めたのか、いずれかの事態が起こっていたからである。この際のフェルマからの所見が、メルセンヌからデカルトに転送されたわけである。この事態に対してデカルトは、「生まれる前から息の根を止めんとする」⁹ 行為として、フェルマだけでなく、メルセンヌに対しても不信感を抱いた。そのさなかに、フェルマは自身の『極大・極小論』などをデカルトに送付し、デカルトの『幾何学』の方法よりも、自身の方法がより優れていると誇示する挙に出る。論争を仲介する役割であるメルセンヌは、独自の判断でロベルヴァールとエティエンヌに判断を求め、事態はいっそう紛糾する。以上がデカルト＝フェルマ論争のあらましである。

光学論争においては、この問題の詳細はすでに論じたことがある¹⁰ ので繰り返さないが、結論だけかいつまんで述べておくと、フェルマは、デカルトに特有の力学的概念である「方向決定」という概念がテキスト内で矛盾して用いられていることを、きわめて説得的な仕方の説明して見せることに成功した。デカルトは自身が提示した概念が十分理解されていないと感じ反論を試みるが、フェルマの指摘した論理矛盾は明らかであり、軍配はフェルマに上げざるを得ない。とはいえこの論争においては、デカルトが「方向決定」によって果たそうとしてなしえなかった力の概念の定式化には、フェルマも十全に至りついたわけではなく、デカルトの誤謬の指摘に成功したにとどまった。

他方、極大・極小の論争においては誤りが問題になっていたわけではない。デカルトの方法と、フェルマが提示したデカルトとは異なった方法の、どちらがより普遍的で体系的であるか

9 デカルトからメルセンヌ宛、1638年6月29日(AT, II, p. 175)。

10 金森修編『合理性の考古学』東京大学出版会、2012、第1章「初めに光ありき——知の基軸としてのデカルト光学——」、p. 45-55。

という、方法を巡る争いであった。この論争において特に問題になったのは接線決定法であり、具体的には放物線に対して、外部の点 E から接線を引く方法を定めるものである。これに対しデカルトは、『幾何学』で展開された解析幾何学の手法に従って、重解を求めることによって解決することができ、そしてそれが最も普遍的な解法であると主張する。デカルトの主張の根拠を、『幾何学』に沿って辿ってみよう。

『幾何学』は第一巻の冒頭で、方程式が解をもつことの幾何学的表現を与えている。たとえば、 $z^2 = az - b^2$

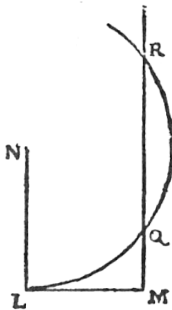
の方程式であれば、

NL を $a/2$ に等しく置き、LM を b に等しくする。LN に平行に MQR をひき、N を中心として L を通る円を描いて、MQR を点 Q, R において切る。すると求める線 z は MQ または MR であり、それぞれ

$$z = a/2 + \sqrt{1/4 a^2 - b^2}$$

$$z = a/2 - \sqrt{1/4 a^2 - b^2}$$

と書ける。この円が MQR と交われば解をもち、接すれば重解で、交わらなければ解をもたないわけである¹¹。



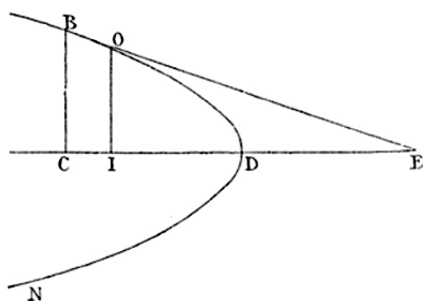
引き続き第三巻では、この交わらない場合である虚根を想像的な解として、方程式の解の数を網羅的に調べ上げていく。このようなさまざまな曲線の解に関するきわめて体系的な研究は、『幾何学』第三巻で初めて十全に説明された事柄¹²とデカルトは自負しており、じっさい、幾何学的対象を方程式と相互に関連させた体系的な重解条件の定式化は、数学史的にもデカルトの独創性が発揮された箇所である。

それに対してフェルマは、いわゆる最大最小の方法を駆使するのが最も普遍的な解法であるという。それは E からの線分が放物線と二点 B, O で交わるとして、EI を A, B, O から軸に下

11 『幾何学』 (AT. VI, p. 376)。

12 デカルトからメルセンヌ宛、1638年1月付 (AT. I, p. 490)。

ろした垂線の足を C, I として CI を E とし、 $A + E$ の E をゼロに近づける、というものである。今日でいうと、平均変化率を求める際、2 点を $a, a+h$ とおいて、 h をゼロに近づけるのと同じ発想をとっているように見えるので、現代のわれわれにはこれをもって微分の先駆的な解法と考えられよう。また、デカルトの方法は重解を求める方法なので機械的曲線までしか及ばないのに対し、フェルマの方法は超越曲線でも適用可能なので、フェルマの方法がより普遍的と評価できよう。



しかしデカルトはそうは考えなかった。デカルトの見立てでは、「この（フェルマの）規則は虚偽の措定にほかなりません、そしてそれは帰謬法という、数学において非常に価値が低くまた巧妙さを欠く証明法に基づくもの」¹³であり、「アルキメデスもパッポスも、他に証明法がない時にやむを得ず取る方法」ということになる。他方デカルトの方法は、先に見た『幾何学』第一、三巻に示されているように、「最も高貴な証明法、すなわちア・プリオリ [先にあるものからの] と呼ばれる証明法に基づいている」¹⁴から「私の用いている方法より、彼の規則の方が単純で容易ということではできません」¹⁵と重ねて主張する。

デカルトの立場を最大限に汲んだ解釈をしているマホニーによると、「表面上の類似性とはうらはらに、フェルマの方法は、無限小を取り扱う数学ではなく、あくまでも有限数学の範囲内で理解すべき」である。フェルマは、2 次方程式においてふたつの根が重なるという想定（すなわち、ふたつの根を $a, a+e$ とした場合に、 $e=0$ とする）を導入している。これは古代から存在する、「虚偽の措定に基づく計算法」¹⁶なのである。

マホニーほどデカルト寄りではない見解としては、原亨吉『近世の数学』がある。原は接線問題に関するフェルマの思考を、発展的に二段階に分けている。それによると第一段階では、

13 デカルトからメルセンヌへ 1638 年 1 月 (AT. I, 486-496.)。

14 デカルトからメルセンヌへ 1638 年 1 月 (AT. I, 490)。

15 デカルトからメルセンヌへ 1638 年 6 月 29 日 (AT. II. 176)。

16 Michael Sean Mahoney, *The mathematical career of Pierre de Fermat, 1601-1665*, Princeton University Press, 1994 2nd ed. 『デカルト全書簡集』第二巻の東慎一郎による解題 1 を参照。

①極値を与える点は一点であるというパッポスの指摘と、②ヴィエトの方程式論から、「(1) 等式 $f(a)=f(e)$ を立てて $a=e$ とおけばよい。なぜならば、 y の変化に伴って a と e の差は減少し、 y が極値に達したときその差はまったく消えてしまうからである」。(2) 「しかし e は a と同じく未知数である以上、 e を $a+e$ で表して構わないから $f(a)=f(a+e)$ とおいて $e=0$ とすれば計算はより簡単である」。

第二段階として、「函数 $f(a)$ の値の極大または極小にする a の値を見出すためには、 $f(a+e)$ を作り、これを $f(a)$ と *adaequare* せよ」という。*adaequare* はディオファントスに由来する用語で、近年は「向等する」と訳され、近似的等値の操作を意味する。フェルマはこの第一段階の (2) を第二段階の操作と同一視しており、その結果、「第一段階から第二段階に移るとともに代数学から解析学に移りながら、そのことを (フェルマは) 明確に自覚していなかった」¹⁷ と原は総括することになる。

このようにフェルマが、われわれの考えるような微分法によって形式的に接線を見出したわけではないことは、そもそも極値を求めてからその接線を求めようとしているのだから、明らかであろうが、とはいえフェルマの発想は優れて代数的であり、その点、幾何学的対象を方程式に書き直そうというデカルトの発想とは異質であることも明らかである。それゆえ幾何学的な発想から「虚偽の指定」と断じたデカルトの批判は、学問的に本心であろうが、フェルマの方法の長所——その代数的性質により超越曲線にまでおよび、機械的曲線にとどまったデカルトの方法より普遍性がある——を見逃しているように見える。

さて、ここまでは感情的なわだかまりを抱えつつも、純粹に学問的な論争であるが、フェルマの方法に普遍性がないことを示そうとしたデカルトのパロディ論文を機に、話が拗れ始める。これはフェルマが示した例である放物線における証明を、そのほかの文言はそのままに、「放物線」という言葉だけを「双曲線」や「楕円」に置き換えると、誤った答えが導かれることを示したものである¹⁸。デカルトはあえて曲線の特性の違いを意図的に無視して、フェルマの方法が普遍性のないことを示そうとしたわけである。

こうしたいわばパロディ的な批判は、ロベルヴァルの強い反発を買い、デカルトは曲線の個々の特性を無視して一般的に扱っているから総称特性と特称特性を混同しており、それゆえ論理学を一から学びなおすべきである、との批判を呼び起こす。ロベルヴァルは言う、「総称特性だけについて議論しているならば、そして他の事柄にもあてはまるような議論をしているだけならば、特称特性を導き出すことは不可能です。これは、論理的に思考することを仕事と心得

17 原亨吉『近世の数学』筑摩書房、2013、pp. 132-136 参照。1975年に刊行された『数学史』第二部を文庫本化である。

18 デカルトからロベルヴァルに抗して、1638年3月1日付 (AT. II, pp. 5-10)。

る者ならば、誰もが知っていなければならない事柄です」¹⁹。さらにこの数学者は、ラフレーシュの秀才に対して「それができなければ、学校をやり直させましょう」²⁰と続ける。ロベルヴァルの筆は辛らつであるが、だがしかし、デカルトも明らかにやり過ぎであった。当初は学問的な論争であったフェルマとの接線論争は、以後、感情的なもつれに繋がっていただろうことは、想像に難くない。

こうした状況の中、ロベルヴァルとエティエンヌが党派的にフェルマと繋がっていると見たデカルト²¹は、第三者の判断を求める。「私が知っている限りは、パリでこの件について意見を求めてもよい人物はふたりしかいません。ミドルジュ氏とアルディ氏です。他にも有能な人物はいるかもしれませんが、私はそうした人を知りません。」²²この両者とデカルトは、1620年代のパリ滞在期に知遇を得ていた。しかしミドルジュの数学の力量は、明らかにロベルヴァルに劣るように思われる。デカルトは言う。「あなたがいかがして私の『幾何学』をものにしておられるか、お伺いしてよろしいでしょうか。当初は計算がややこしくてあなたをうんざりさせているのではと恐れていますが、しかし、それを克服するのに何日もかかりませんし、後になってみればヴィエトの計算よりも、はるかにずっと簡潔で便利であることが分かるはずです。また、第2巻を読む前に第3巻を読むべきです。というのも、こちらの方がずっと易しいので。もし計算について特段のこつを送付するようお望みならば、それを書こうと申し出ている友人がここに一人おりまして、私もお書きするのに吝かではないのですが、しかし私は彼ほどうまくできません」²³。さらにアルディに対しても書簡を送っている²⁴が、デカルトの呼びかけに応じた気配はない。結局、デザルグが仲介を買って出たようであるが、1638年4月4日付の書簡に見られるこの仲介は、通り一遍のものであった。射影幾何学の分野に名を残したこの数学者も、解析幾何学については、「私の幾何学の理解のために、あなた（メルセンヌ）にお約束していた書き物の一部をお送りいたします。(…)それはなにかんづくデザルグ氏のためにいたしました」²⁵と述べているように、ミドルジュと同じ程度であったようである。そうだとするとこの論争におけるロベルヴァルの発言力は、メルセンヌ・アカデミーの中ではもっとも影響が大きかった

19 ロベルヴァルからデカルトに抗して、1638年4月付(AT II, p. 112-113)。

20 同上(AT II, p. 113)。

21 エティエンヌおよびロベルヴァルとフェルマとの交際は、1636年頃に機械学を巡る議論から始まっているが、面識はなく、とりわけ深い同盟関係があったわけでもなさそうである。メルセンヌは失われた書簡の中でこの件についてデカルトに伝えたようで、デカルトも、「パスカルとロベルヴァル両氏が、あなたのお手紙が想像させたほどには、フェルマ氏と特別に近しい関係を結んではいなかったと分かって、とても喜んでいます」デカルトからメルセンヌへ1638年3月31日(AT. II. 82-99)と述べている。またデカルトもロベルヴァル、エティエンヌ、フェルマのいずれとも面識がない。

22 デカルトのロベルヴァルおよびエティエンヌ・パスカルに対する反論1638年3月1日(AT. II, 1-13)。

23 デカルトからミドルジュへ1638年3月1日(AT. II. p. 22-23)。

24 デカルトからアルディ宛て1638年6月(AT. II. p. 170-173)。

25 デカルトからメルセンヌ1638年5月27日(AT. II. p. 152)。

のではないだろうか。

3. デカルトとモラン

モランが当時置かれていた状況と、デカルトとの関係については序章で述べた通りであるが、ここでは1638年に交わされた論争の中身を見てみよう。モランは、光学に焦点を絞って『屈折光学』と『気象学』を批判していくが、その論点は、自然学的な説明、たとえば、デカルトの想定する微細な物質の粒子の性質や運動について、透明な物体にあるとされる孔について、光の伝播の瞬間性についてなどであり、フェルマが運動の分解と合成に関する数理的な側面を論難したのと比べると、かなり伝統的な自然哲学に寄り添った批判となっている。こうした主題そのものについてロベルヴァルは、「われわれは何も証明を持っておらず、賛成も反対もしない」²⁶と、かなり冷淡な態度をとっている。こうしたロベルヴァルの態度は、おそらくメルセンヌ・アカデミーのメンバーに共有されていて、とくにエティエンヌは強く保持していたものと思われる。というのも、息子のブレーズを回想したジルベルトによると、自然の驚くべき現象についてブレーズはあらゆる理由を知りたがったが、「そのような理由が全て知られているわけではないので、父（エティエンヌ）はそれを言ってくれなかった」²⁷ ようだからである。

ところでモランは、アリストテレスを弁護する本を出版しているアリストテレス主義者であり、実際に光学においてもそうした立場は保持している。そのアリストテレス主義的傾向はとりわけスコラ的論証への絶対的な信頼という形で表れている。モランはデカルトに次のように語る。

しっかり論証された真理ならスコラ学派のどんな用語にも耐えられること、そしてこの吟味に耐えられないあらゆる命題は、まったく偽というわけではなくとも、少なくとも疑わしいことは、容易に承認いただけることと思います。(…)スコラ学派は、彼らが適切な経験(実験)によって事物の真理それ自体を探求するよりも、事物を論じるのに用いるべき用語の探求に、思弁的により関心を向けているという点において誤っているだけのように思えますから、したがって彼らは経験においては貧困で、用語においては豊かなのです。そういうわけで、私はあなたのように、自然の中にのみ事物の真理を探究し、スコラ学派にもはや信頼を置かないわけです。スコラ学派は私には用語しか用を足しません。²⁸

26 ロベルヴァルからデカルトに抗して、1638年4月付(AT. II, p. 113)。

27 *Blaise Pascal Œuvres complètes, établies, présentées et annotées par Jean Mesnard, Desclée de Brouwer* «Bibliothèque européenne», 1964-, t. I, p. 572.

28 モランからデカルト宛、1638年2月22日付(AT. I, p. 541)。

いかに実験を行い、新しい現象に注目しようとも、結局はスコラの言葉で語られ、スコラ的な論証によって記述される。このことは重厚な伝統をもつ光学においてはいっそう顕著であり、最終的にデカルトを辟易とさせることになった。これについては、すでに別稿で論じた²⁹のでここでは省略して、本稿では、こうした立ち位置の人物とデカルトがどのような人間関係を取り持っていたかについてのみ、簡潔に述べることにしたい。

デカルトのモランに対する評価は意外なほど良好である。メルセンヌに対しても「モラン氏につきましては、彼のご説は好意的に受け止めたこと、そして必ずやできるかぎり几帳面に、丁寧に、早いうちに、お返事申し上げること、私の答弁とともに印刷して公表する——というのも彼がそうするのがよいとおっしゃっているので、彼の名前を付すにしろ付さないにしろ、お望みのようにして——ことを、彼に請け合ってくださいませ」³⁰、また同じくメルセンヌに対して別便でも、「モラン氏につきましては、私は全く別様に考えていまして、彼の反論に感謝しているつもりであり、一般的に、真理が露わになるようにという意図をもって私に反論を示すどんな人に対しても、感謝の念を持っているつもりです」³¹と述べている。

こうしたデカルトの好意に対してモランも心を開いていたのか、明らかにエティエンヌたち調査委員会に対する不満をデカルトにぶつけている。

連中ときたら、あたかも新星のように優れた精神が現れているのを目の当たりにしながらも、その労苦や新しい創意に感謝することもなく、その人物に対する妬みで膨れあがり、しかも、その人物が鷹揚にも知識を与えてくれたおかげで無知から抜け出しているのに、その名前、栄光、美点を消し去り曇らせることに積逬力になっているのです。私自身こうした辛辣な批判にあってきましてし、それらがとるに足らないものだということも知っています。後の世の人々は、私の不幸を嘆き、鉄の時代について語り、幸運の女神は学識あるものの味方ではなかったと、正当にも語るでしょう。³²

こうしたモランの嘆きに対して、まさにフェルマ論争の応酬のただなかにいたデカルトは、「あなたの言う悪意に満ちた連中ですが、いつの時代にも現在と劣らずこんな連中はいました。私は連中を、よく熟した果実だけを選んでついばもうとする鳥や蠅に例えていますから、『三試論』が彼らによって攻撃されているのを見るとなおさら、自分の本に満足するのです」³³と語り、エティエンヌに対する不審の念を共有するのである。

29 金森修編『合理性の考古学』、p. 61-84。

30 デカルトからメルセンヌ宛、1638年3月31日付(AT. II, p. 84)

31 デカルトからメルセンヌ宛、1638年5月27日付(AT. II, p. 145)

32 モランからデカルト宛、1638年2月22日付(AT. I, p. 557)

33 デカルトからモラン宛、1638年7月13日付(AT. II, p. 220-221)